

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

アルフレド・ジャー アーティスト

Alfredo Jaar / Artist



CREATOR INTERVIEW ^{No} 176

アルフレド・ジャー Alfredo Jaar

アルフレド・ジャーは、リスボンを拠点とする作家であり、写真家、建築家、映像作家である。作品は世界各地で展示され、ヴェネチア・ビエンナーレ（1986、2007、2009、2013）、サンパウロ・ビエンナーレ（1987、1989、2010、2021）、ドクメンタ（1987、2002）に出品されている。

主な個展は、ニュー・ミュージアム（ニューヨーク、1992）、ホワイトチャペル（ロンドン、1992）、ストックホルム近代美術館（1994）、シカゴ現代美術館（1995）、ローマ現代美術館（2005）などで開催されている。その他、ローザヌ美術館（2007）、ピレリ・ハンガー・ピコッカ（ミラノ、2008）、アルテ・ナショナル・ギャラリー、ベルリニッシュェ・ギャラリー、ノイエ・ゲゼルシャフト・フュア・ビルデンデ・クンスト（いずれもベルリン、2012）、アルル国際写真フェスティバル（2013）、ヘルシンキ現代美術館（2014）、ヨークシャー彫刻公園（2017）、ツァイツ・アフリカ現代美術館（ケープタウン、2020）、セスキ・ボンベア（サンパウロ、2021）、ギンドル（ベルリン、2024）で展覧会が行われた。

日本においては、2018年のヒロシマ賞受賞にともない、2023年に広島市現代美術館で個展が開催された。

世界各地で70以上の都市介入型プロジェクトを実施し、80冊を超える書籍が出版されている。

No

176

アルフレド・ジャー アーティスト

ALFREDO JAAR / Artist

TONIGHT NO POETRY WILL SERVE

都市が創造的で想像力に満ちた
場所になるために。



クリエイターインタビュー

『都市計画の最初の一步から、
アーティストを招き入れる』

published_2026.03.13 / photo_yoshikuni nakagawa / text & edit_rumiko inoue

国際的に著名なアーティストであり、深い洞察力と思索的な作品で知られるアルフレド・ジャーさんは、現在東京で2つの大規模な展覧会を開催中です。1つ目は東京オペラシティ アートギャラリーで開催されている「アルフレド・ジャー あなたと私、そして世界のすべての人たち」、もう1つはSCAI PIRAMIDEで開催されている「アルフレド・ジャー 和田礼治郎」です。どちらの展覧会も、ジャーさんが持つ独自の視点や詩的なアプローチを通じて、世界の社会問題や地政学的なテーマに深く切り込む作品を展示し、観る者に自身の視点や世界の捉え方についてあらためて考えさせてくれる内容となっています。そんなアルフレド・ジャーさんに、彼の創作哲学、社会・地政学的問題へのアプローチ、そして東京で開催中の2つの展覧会に込められたインスピレーションについてお話を伺いました。

建築するように、アートをつくる。

私はずっとアーティストになりたいと思っていました。幼いころからその夢を抱き続けてきたんです。でも、「アーティストになりたい」と父に話すと、こんな提案をされました。「それはあまり現実的じゃないかもしれない。代わりに建築を学んでみてはどうだろう」と。「建築家になればアートもできるし、何より生活が安定する。アーティストよりもずっと良い人生が送れるんじゃないか」。なるほど、それには一理あると思いました。でも、だからといって、私は建築家になるために建築を学ぼうとしたわけではありません。心の中には、最初からアーティストになりたいという想いがありました。私はアートを追い求めるために建築を学んだのです。建築がアートを追求するための基盤になる、そう信じていました。そんな風にして私のアーティストとしての人生が始まりました。

だからこそ、私は自分のことを「アートをつくる建築家」だと思っています。建築家の方法論を使ってアートを生み出しているという感覚なんです。実は私は正式にアートを学んだことがありません。だから最初は、「アートはどうやってつくるのだろう」と自問し続けていました。正直、その答えはまったく分かりませんでした。ただ、建築のことなら分かっていました。そこで、建築のプロセスや考え方をそのままアートに応用しようと決めたのです。

このアプローチは今でも私の中に根付いています。建築を学んだときの方法論や構造をそのまま作品制作に活かしているのです。私にとって建築とアートは切り離せない存在です。今でもアーティストとして活動しながら、考え方や仕事の進め方の中に、建築の影響を感じる瞬間がたくさんあります。

チリを離れ、そしてニューヨークも去ることに。

私はチリで生まれ育ちました。若い頃、ピノチェトによる軍事クーデターを経験し、彼の政権下での生活を余儀なくされました。検閲や弾圧などが日常化し、厳しい統制が敷かれた軍事独裁の時代です。その生活は想像を絶するほど辛く、困難に満ちていました。「この国を離れたい」という思いが心の中に強く芽生えたのも無理はありません。でも、まずは学業を終えることが最優先だと考えました。教育を修了するまではチリに残る決意を固め、建築の学位を取得した後、ようやくチリを離れることができました。

その後、1980年代初頭、私はニューヨークへと拠点を移しました。なぜニューヨークを選んだのかというと、当時のニューヨークは世界のアートの中心地だったからです。アーティストを目指していた私にとって、自分が進むべき場所だと思えたのです。ニューヨークでの生活は長く続きました。そこを拠点に活動を広げ、多くの経験を積むことができました。

しかし、現在私はニューヨークを離れ、ポルトガルのリスボンに移住しています。その理由はシンプルですが、私にとってはとても大きな決断でした。それは、ファシズム（全体主義）の台頭を感じ取ったからです。かつて、ファシズム政権下のチリを離れる決意をしたのと同様に、アメリカでトランプ政権が台頭するのを目の当たりにして、再び「ここを去らなければならない」と感じたのです。そして1年前、私はリスボンでの新しい生活を始めました。

東京での個展と二人展について。

現在、東京オペラシティアートギャラリーで「アルフレド・ジャー あなたと私、そして世界のすべての人たち」という大規模な展覧会を開催しています。それに合わせて、SCAI THE BATHHOUSE が、六本木にある SCAI PIRAMIDE で「アルフレド・ジャー 和田礼治郎」という展覧会を企画してくれました。和田礼治郎さんも私も、SCAI THE BATHHOUSE に所属していることもあって、以前から親しくさせていただいています。お互いリスペクトし合い、素晴らしい関係を築いてきた間柄です。こうしたつながりがあったからこそ、「二人展をやってみよう」というアイデアはごく自然に生まれました。展覧会の準備では、和田さんと一緒に「何ができるか」をじっくり話し合い、アイデアを共有しながら形にしていきました。そのプロセス自体がとても刺激的で、貴重な経験となりました。このようにして、二人展が実現したのです。



アルフレド・ジャー あなたと私、そして世界のすべての人たち

アルフレド・ジャー氏の1970年代の初期作品から作家活動を代表する作品、また、展覧会のために制作された新作が登場。作家が半生を振り返りながら構成した作品を通じて、鑑賞者が世界と自分自身、アートの力と向き合う機会を創出しています。2026年3月29日まで開催中。

画像：展示風景画像 Photo: 木奥恵三

六本木での展示は、東京オペラシティアートギャラリーでの展覧会とは全く異なるものにしたと考えました。今回は、和田さんとの「対話」を生み出すことに焦点を当てた展覧会にしたかったのです。そこで、和田さんが抽象彫刻家として追求している「抽象」というテーマに取り組むことにしました。

和田さんの作品に応える形で、私は彼の彫刻が持つミニマリズムに直接向き合う作品を制作しました。彼のアプローチと私のアプローチ、その2つの間に対話が生まれるような作品を目指したのです。



アルフレド・ジャー 和田礼治郎

SCAI PIRAMIDEにて開催中のアルフレド・ジャーと和田礼治郎による二人展。本展のために制作された新作で構成されており、ジャーによる東京オペラシティの個展「アルフレド・ジャー あなたと私、そして世界のすべての人たち」と和田の参加する「六本木クロッシング：時間は過ぎ去る 私たちは永遠」とあわせて鑑賞したい。2026年4月18日まで開催。

画像：アルフレド・ジャー《Tonight No Poetry Will Serve》2023 / 2025、ネオン、15 x 300 cm

協力：SCAI THE BATHHOUSE

https://6mirai.tokyo-midtown.com/event/alfredo_jaar_reijiro_wada/

現実をどう捉えるか —アートの3つのアプローチ。

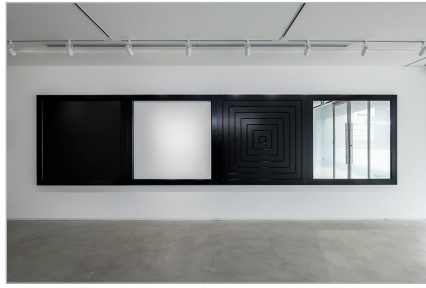
壁に均等に並べられた4つの黒い額縁による《1+1+1+1》というインスタレーション作品では、アートを制作する3つの異なるアプローチを提示しています。それぞれのフレームが、異なるアートの在り方を象徴しています。

1つ目は、黒い額縁に黒い背景のパネルです。この額縁は、私たちが現在生きている「非常に暗い時代」を象徴しています。今、世界は混乱に陥っています — 戦争やジェノサイド、不安定な環境が私たちの生活を支配しているのです。未来はますます予測不可能になり、グリーンランドや台湾を巡る新たな紛争がいつ勃発するのかも分かりません。何が起きるか、誰にも予測できない状況です。例えば、トランプがベネズエラに侵攻し、大統領を拉致した出来事。そのような予測不能な出来事が現実として起こり、そして誰もそれを止められないのではないかと感じるのです。これが、私が「暗い時代」に生きていると考える理由です。

2つ目は完全に空っぽな額縁です。何も示唆せず、ただ現実を切り取るだけのアートです。これは受動的なアートであり、現実をそのまま提示するだけで、行動を喚起したり、社会に変革をもたらしたりすることはありません。その隣のフレームは入れ子状に繰り返す視覚構造になっています — フレームの中にさらにフレームがあり、その中にまたフレームが続いていく。これは「アートのためのアート」を象徴しています。現実の世界から切り離され、純粹に自己言及的で装飾的なアートです。美しさだけを追求し、世界の問題や真実に目を向けようとはしない。このようなアートは「芸術」というよりも、むしろ「装飾」に近いと私は考えています。

そして最後のフレームには、鏡がはめこまれています。このフレームこそ、私が最も興味を抱くアートの形です — 現実を反映するアート。このタイプのアートは、外の世界と関わり合いながら、社会の複雑さや葛藤、そして真実を映し出します。

このように、《1+1+1+1》はアートを制作する3つの方法論を提示しているのです — 現実をフレームに収めるか、現実を無視するか、あるいはそれを反映するか。この中で私が最も力強いと感じるのは、鏡によるアプローチです。それこそが、アートにおいて最も意味を持ち、影響力のある方法論だと私は信じています。



1+1+1+1

ドクメンタ (1987) で発表した初期作品をもとに本展のために再構成されたジャーの新作。金箔であしらった豪華な額縁に、困難な状況に置かれた子どもたちの写真と鏡が対をなしていた旧作とは異なり、本作では、「美術作品を観るという行為」そのものを問うジェスチャーとして展示されている。

画像：アルフレド・ジャー《1+1+1+1》2025、木、鏡各150 x 150 x 5 cm

協力：SCAI THE BATHHOUSE

対話を通じて美しい調和を醸成すること。

和田さんは、多層的なアプローチで作品を制作するアーティストです。彼の作品は現実をフレーミングするものですが、単に中身のない空白のフレームを使って中立的に現実を切り取るものではありません。和田さんのフレームはその中に「何か」を含んでいます —それはお酒です。これまでに、彼はワインやウイスキー、さまざまな種類のお酒を使用した作品を制作してきました。今回の作品では、フレームの中にグラッパが収められています。つまり、私たちは単なる空っぽのフレームや単純な現実のフレーミングを見ているのではなく、グラッパという層を通して、言い換えれば「お酒そのものの存在」を通して現実を見ているのです。

さらに、そのミニマルなフレームは、自然 — 「命を失った木」の彫刻によって支えられています。私の作品が政治的、社会的、文化的な現実には焦点を当てているのに対し、和田さんの作品はむしろ自然の視点からアプローチされています。このようにして、私たちの2つの作品はお互いを非常に美しく補完し合っているのです。



PORTAL (2025)

和田による新作。ジャーの作品に呼応するように、天地逆さまに据えられたブロンズ製の枯れた葡萄の木によって支えられているフレーム。2枚の強化ガラスで密閉されたフレームの中には透明なグラッパが流し込まれ、わずかな負圧を生じさせることで、ガラス面を通過する光に微細のたゆみが生んでいる。

画像：和田礼治郎《PORTAL》2025、グラッパ、強化ガラス、真鍮、ステンレス、ブロンズ、120 x 150 x 40 cm 協力：SCAI THE BATHHOUSE

協力：SCAI THE BATHHOUSE

TONIGHT NO POETRY WILL SERVE

アルフレド・ジャー アーティスト
ALFREDO JAAR / Artist

published_2026.03.13 / photo_yoshikuni nakagawa / text & edit_rumiko inoue

東京で新たなアートの旅へ。

私の日本でのキャリアにおける最も重要な節目のひとつは、2023年に第11回ヒロシマ賞を記念して広島で開催した大規模な展覧会でした。この展覧会は大きな成功を収め、それがきっかけとなって、東京の美術館で大規模な展覧会を企画しませんか、というお誘いをいただき、喜んでお引き受けしました。



ヒロシマ賞

1989年に広島市によって設立された、平和の促進に貢献したアーティストに授与される賞。2018年には、ジャーが第11回受賞者として選出された。

過去の受賞者には、三宅一生、オノ・ヨーコ、蔡國強、モナ・ハトゥム、などが名をつらねる。ジャーの受賞を記念し、2023年7月22日から10月15日まで広島市現代美術館にて「第11回ヒロシマ賞受賞記念 アルフレド・ジャー展」としてジャーの個展が開催され、平和への思いを表現した作品を展示した。

東京オペラシティ アートギャラリーでの展覧会「あなたと私、そして世界のすべての人たち」は、回顧展ではなく、あらためて一連の作品を選定・編集したアンソロジー的な展示です。私のキャリアのさまざまな時期から厳選された作品を丁寧にキュレーションした内容となっています。展示作品は、1970年代、1980年代、1990年代、2000年代、さらには2020年代のものまで含まれており、この幅広いコレクションを通じて、私の表現の進化や、何十年にもわたり取り組んできた多様なテーマをご覧いただけます。

この展覧会では、コミッションワークも2作品展示しています。1つ目は広島展のために制作した重要な作品「ヒロシマ、ヒロシマ」で、今回初めて東京で公開されました。2つ目は東京オペラシティ アートギャラリーのために特別に制作した新作「明日は明日の陽が昇る」です。この2作品とあわせて、私のキャリアのさまざまな時代の作品を展示しています。訪れる方々に、私がアーティストとして歩んできた道のりを包括的に感じていただける内容となっています。



「すべての戦争は鉱物が引き金に」 — 《The End of the World》の背景にあるもの。

今、私が最も懸念している世界的な問題のひとつは、世界のトップ10に数えられるクリティカルミネラル（重要鉱物）が抱える危機的な状況です。私の最新作《The End of the World》は、これらの鉱物をめぐる紛争をテーマにした作品です。ただ、この作品は東京オペラシティでの展覧会では展示されていません。この作品を効果的に展示するためには特殊な展示条件が必要ですが、今回の会場ではそれを満たすことができなかったのです。

《The End of the World》では、これらの鉱物の採掘、それをめぐる支配構造、そして地政学的な問題に焦点を当てています。これらの鉱物は、現代社会を支え、私たちの生活の基盤となる重要な資源でありながら、その一方で紛争や戦争の原因にもなっています。たとえば、プーチンがウクライナに侵攻した理由のひとつとして、ウクライナがヨーロッパに供給されるリチウムの80%を掌握している点が挙げられます。リチウムは、電気自動車のバッテリーなど、私たちの暮らしを支えるさまざまな技術革新に欠かせない資源です。この資源がなければ、これまでの多くの進歩は実現しなかったでしょう。

この作品を通じて私が伝えたいのは、今起きている戦争、そしてこれから起こりうる戦争の多くが、これらの鉱物と深く関係しているということです。これらの資源は、世界の政治を動かす、紛争を引き起こし、そして最終的には人類の未来そのものに影響を及ぼしているのです。



台湾とグリーンランドが地政学的紛争の中心にある理由。

《The End of the World》は、特に鉱物資源をめぐる潜在的な紛争についても探求しています。近い将来起こり得る戦争のひとつが台湾を巡るものです。なぜなら、台湾は世界で唯一、iPhone やコンピューター、爆弾、飛行機、ドローンなど、あらゆるものに必要なマイクロプロセッサとマイクロチップを製造している国だからです。これらのマイクロチップの製造にはレアアースを含む多くの鉱物が使用されています。そして、レアアースを世界で最も多く生産しているのが中国です。21世紀を生き抜く上で、レアアースは必要不可欠、と言っても過言ではありません。これがアメリカが台湾を手に入れようとする理由であり、同時に中国がそれを許さない理由です。台湾はこの緊張の中心にあり、次の大きな戦争や紛争を引き起こす可能性があります。

もうひとつの潜在的な戦争の舞台がグリーンランドです。なぜドナルド・トランプがグリーンランドを買おうとしたのでしょうか。彼は安全保障の理由だと主張し、グリーンランドには多くのロシア人や中国人が入り込んでいると言いました。しかし、これは明らかな嘘です。グリーンランドにはロシア人も中国人もいません。戦車も軍隊もポートも、何ひとつ存在しません。それでも、トランプはこの嘘を使ってグリーンランド占領を正当化しようとした。本当の理由は、残念ながら、地球温暖化によってグリーンランドが溶け始め、大量の鉱物資源、特にレアアースが発見されたからです。トランプはこれらの鉱物資源を必要としているためグリーンランドを手に入れたがる、というのがグリーンランドを占領しようとした本当の理由なのです。

《The End of the World》では、こうした紛争、つまり重要な鉱物資源の採掘と支配をめぐる争いが、いかにして世界的な緊張を引き起こし、戦争の未来を形づくっているかを表現しているのです。

アルフレド・ジャー アーティスト

ALFREDO JAAR / Artist



published_2026.03.13 / photo_yoshikuni nakagawa / text & edit_rumiko inoue

アートを最初から都市計画に組み込むことで生まれる創造性。

今の都市空間には想像力が、そこにある建築物には創造性が欠けています。あくまで私見ですが、これまで何度も目の当たりにしてきた現実です。多くの場合、デベロッパーや建築家はプロジェクトをほぼ完成させたタイミングで、最後の最後にアートのことを考え始めます。あいているスペース、小さなコーナー、ガーデンスペースを見て、「何かが必要だな。アーティストを呼んで飾り付けてもらおう」と考えるのです。しかし、その時点ではもう遅すぎるのです。

巨大なプロジェクトは、用途、スケール、色彩、光、プロポーション、そして設計上の実用的な要素まで、細部まで考え抜かれて完成します。しかし、最後の最後にアートを「付け足し」のように端っこに配置する—そんなやり方は間違っています。

だからこそ、私はこうしたプロジェクトには参加しません。都市が本当に創造的で想像力に満ちた場所になるためには、アーティストが最初の段階から関与する必要があると考えるからです。例えば、ある開発者や建築グループが私にこう話しかけてきたとします。「土地があって、予算もあります。10棟の住宅ビルと20の商業スペース、そして公園を作る計画です」。私は、その瞬間から議論に参加したいのです。それは、すべてのアパートやすべての店舗、あるいはすべての植栽にアートを配置するという意味ではありません。そういうことではないのです。

「対話」をしながら、空間設計やビジョンを打ち出すチームの一員となるのが大切なのです。このプロセスを踏んではじめて、都市デザインの DNA に創造性を注入することができるのです。

私の願いは、都市が想像力を刺激する場所になることです。空間が創造性を育み、人々に新しい考え方を促すような都市です。それは単に実用性や装飾デザインの問題ではなく、人生そのものと深くつながる環境をつくることなのです。こうした都市、つまり最初からアートと創造的な思考が注がれた都市こそが、私が夢見る場所なのです。

アートで世界は変わらないけれど、「世界は違う未来に向かうことができる」と示すことはできる。

アートの定義は無数にありますが、「アートとは、与えられた現実の秩序を変えようとする試みである」というナイジェリアの偉大な作家チヌア・アチエベの言葉に深く共感しています。この言葉は、私がアートに惹かれる本質を見事に言い表しています。それは、生きている現実世界に立ち向かい、その枠組みを再構築するという考え方です。しかし、世界を変えることがいかに難しいかを思い知らされる場面も少なくありません。それでも、その挑戦こそが私の創作意欲を駆り立てる原動力となっています。

これまでの経験の中で、「アートで世界は変わらない」という厳しい現実を受け入れざるを得ませんでした。しかし、アートには非常に強い力があって「世界が今とは違う未来へ向かえる」可能性を私たちに示してくれるのです。アートを通じて、新しい可能性に気づき、異なる物の見方や生き方を垣間見ることができる。だからこそ、アートはかけがえのない存在なのです。

政府やメディア、インターネットなど、あらゆるものが管理され、検閲され、監視される現代社会において、ギャラリーや美術館、大学といったアートや文化を育むための空間は、最後の自由の場だと私は考えています。ここではまだ、自由に問いを立て、想像し、表現することが許されています。

こうした自由の場は、私たちに可能性を思い出させてくれる大切な場所です。しかし同時に、非常に脆い存在でもあります。たとえ現実を完全に變えることができなくても、挑み続けることで新しい視点やアイデアを生み出す瞬間を作ることはできるのです。これこそがアートの役割であり、私がアートに人生を捧げる理由です。

アルフレド・ジャー アーティスト

ALFREDO JAAR / Artist



published_2026.03.13 / photo_yoshikuni nakagawa / text & edit_rumiko inoue

社会にとって最も重要な資本は文化である。

私は、文化は社会における最も重要な資本だと考えています。この思いをそのまま形にした作品も制作しました。それが《Culture = Capital》（文化＝資本）というタイトルのネオンサインの作品です。この作品は、私の文化についての考えを力強く、そして極めてシンプルに訴えかけています。

設置される空間やサイズにあわせてカスタマイズが可能で、たとえば、企業からこの作品を本社のエントランスホールに設置したいという依頼があった場合、私はまずその空間を訪れ、寸法を確認して適切なスケールを提案します。10メートル幅で、文字の高さを1メートルにする、といった具合です。この作品はすでに多くの場所に設置されていますが、必ずしもすべての企業や機関がこのメッセージに共感するわけではありません。しかし、共感した人々にとって、この作品は文化の重要性を信じる力強いステートメントとなるのです。



この作品は、「文化とは単にエンタメや余暇を楽しむも以上のもの。社会の知的・創造的な営みを支える基盤である」という私の信念を反映しています。《Culture = Capital》というステートメントは、文化がどれほど深く私たちの世界を形づくっているかについて考えさせる力強い表現です。これまでに英語、スペイン語、イタリア語、中国語、ドイツ語で制作してきましたが、まだ日本語版は制作されていません。それぞれの言語版は、新しい文化的文脈にこの考えを持ち込む機会を提供し、文化がいかに普遍的に重要であることを強調しています。

六本木未来会議のような活動を目にするたび、文化の重要性を世界中で広めることの大切さをあらためて感じます。アーティストや建築家、ものづくりに関わる人など、様々な人々を結びつける、こうした重要なアイデアを高めるための対話を育む取り組みには、非常に心を動かされます。結局のところ、文化こそが私たちが人間たらしめるものであり、想像力をかき立て、イノベーションを生み出し、社会を前進させる原動力なのです。

撮影場所：『アルフレド・ジャー 和田礼治郎』（会場：SCAI PIRAMIDE 会期：2026年1月21日～4月18日）

取材を終えて……

「建築を手掛けるように作品をつくっている」と語り始めたジャーさん。「建築家が設計を始める前に、建てようとしている建物や土地にまつわるすべての文脈を理解するのと同じように、私もアート作品を制作する際には、自分の周囲で起きているあらゆる政治的、文化的な出来事や特定の瞬間がきっかけとなっているのです。自分の内側から湧き出る想像力だけで制作したことは、一度もありません。」

アーティストは、時代の声をいち早く感じ取り、それを私たちに届けてくれる存在です。今回のインタビューは、未来からジャーさんが送ってくれた手紙のような、特別で心に残る時間となりました。その言葉を胸に、開催中の展覧会へもう一度